保育の創意工夫 1

大人の枠組みの解体

前原　寛

私が保育園で仕事をするようになって、二十五年になります。現在は理事長職にありますが、以前は園長という立場で保育園の保育にかかわっていました。その初期のころですからずいぶん以前のことになりますが、保育について「何かおかしい」と考えていました。年号がまだ昭和のころです。

毎日の保育は、朝の「おはよう」の集まりに始まり、夕方の「さようなら」の集まりで終わっていました。集まりの前も後も子どもたちは園にいて、保育者がかかわっているのですが、当時はそれを保育とはあまり意識していませんでした。また、一定の時間になると、子どもたちを部屋に集めてその日の活動を設定していました。

「こんなにも子どもの活動を限定していいものだろうか」そんな疑問が、少しずつ強くなってきました。

私は、そのころ自分の興味で勉強していたJ.ピアジェの理論から保育を考えようとしていました。ピアジェは認識の生成を主テーマにしていますが、そこではどこまでも子どもの興味・関心を中心に据えていました。子どもにとって大事なのは遊びであり、そのためには子どもの興味・関心から活動が始まることが重要である、ピアジェ理論からはそのような考え方が導かれます。では、そのような保育を実践するために何が必要か、と考えていきました。

「なぜ、子どもの活動を設定してしまうのだろうか。それは、保育者という大人が自分の枠組みを子どもに押しつけているからではないか。子ども自身の枠組みの中に活動が生まれてこなければいけないのではないか。しかし、大人の枠組みを残したままでは、子どもの枠組みは現れてこないだろう。そのためには、大人の枠組みが解体される必要がある。大人の枠組みを解体することによって、子どもの枠組みが現れ出てくる、そこに子ども自身の活動である遊びが生まれてくることになる」。

このような思考プロセスは後から整理したものですが、当時は直観的に、大人の枠組みの解体が必要だと考えました。そこで「解体保育」と名づけた取り組みを始めました。

「解体保育」が、保育用語辞典などに記載されているような専門用語であることは、後日知ったことです。

最初に解体した枠組みは、時間と空間でした。大人がつくった時間割という枠組み、クラスという空間の枠組みを解体することによって、子どもの中から生まれる活動を主体とする実践に変化させようとしました。これも後で知った用語をつかえば、保育者主導型から子ども主体型の実践への転換ということです。それには何年もの日時を必要としました。頭ではわかっていても、実践が変化するということは単純にはいきません。園生活全体にわたって見直すことが必要だからです。

二〇〇九（平成二十一）年四月より保育所保育指針が改定施行されました。今回の改定には幾つかの特徴がありますが、その一つに「創意工夫」の強調があります。保育指針原文で四か所、解説書も含めると二十一か所も言及されています。「創意工夫」という日常語が保育所保育のキーワードとして使用されている、このことをどう受け止めるかが、現在の保育現場の課題の一つになっています。

気になるのは、「創意工夫」を、何らかのアクセントをつけてほかと違った実践をしていることをアピールするという意味で理解する傾向があることで

す。いわゆる目玉保育、ブランド保育のように、対外的な「受け」をねらった保育をすることを「創意工夫」と呼んでいる現場がすでに出てきています。

しかし、「創意工夫」とはそんな表面的な意味ではありません。保育の本質にかかわる何かを意味しているはずです。単に目新しい何かをすることではなく、子どもにとってよりよい生活の場としての保育を目指すための取り組みこそが「創意工夫」と呼ばれるものです。

先述したように、大人の枠組みを押しつけるのではなく、子どもが主体となる保育の取り組みへの転換を図ったのも、当時はそのような言い方はしませんでしたが、創意工夫の現れと言えます。その取り組みは、現在でも継続しています。不断に実践を問い直す営みの中に創意工夫がある、そんな思いをこの連載では取り上げていきたいと思っています。

さて、実践を問い直す視点の一つに、時間の枠組みがあります。大人の設定した時間割で保育するのではなく、子ども自身から生活の流れが新たに形成されるような取り組みを目指そうとしました。そこに浮かび上がってきたのが、「昼寝」でした。「昼寝」は子どもの生活の中でどのような意味をもっているのだろうか、そんな問いが見えてきたのです。次回は、昼寝をテーマに考えていきます。

（鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長）